

小林恭子の ロンドン発 グローバル随想

第42回

英米の「特別な関係」 揺さぶられる



イラスト・題字：長峯亜里

「チャーチルではない」

3月上旬、トランプ米大統領はホワイトハウスで、スターマー英首相をそう評した。なんと失礼で、ぶしつけな物言いだろうか。

第二次世界大戦時の英首相ウィンストン・チャーチルと言えば、米国と共にナチス・ドイツに立ち向かい、連合国を勝利に導いた指導者として知られる。だが、そのような歴史的状況の下での指導者を、現代の首相と単純に引き比べること自体、適切とは言い難い。「あなたはあの人物ではない」という言い方は、比較の体を取りながら、実際には相手をおとしめる響きを帯び、無礼との印象を免れない。トランプ氏がそう言ったのは、米国とイスラエルによるイランへの大規模空爆に英国軍の基地使用を拒まれたことへの怒りからであり、その後も同様の発言を繰り返した。

両国の力関係は逆転

英米の関係は17世紀にさかのぼる。アメリカは1620年、メイフラワー号で英国から新大陸に渡ったピューリタンたちの入植に始まる。独立戦争(1775~83年)を経て英国から独立し



プリマス港到着時のメイフラワー号
(ウィリアム・ハルサル、1841~1919)

たが、19世紀を通じてアメリカは工業化と西部開拓によって膨張し、かつての宗主国を追い越していく。

「特別な関係(Special Relationship)」とは、英米両国間の非常に緊密な関係を指し、この言葉はチャーチル自身が1946年につくった。しかし、この時すでに両国の力関係は逆転していた。

チャーチルは英米の血を引く。父は英国貴族、母はニューヨークの富豪の娘だ。孤立主義のアメリカを参戦させるため、ルーズベルト米大統領に1700通以上の手紙、電話、会談を重ね続けた。1941年成立の「武器貸与法」で、米国が英国に供与した軍需物資は総額約310億ドル(現在の価値で100兆円前後)。英国がその借金を完済したのは2006年だった。



ウィンストン・チャーチル首相とフランクリン・ルーズベルト大統領(1945年、ヤルタ会談にて)